日本
ハンザキ研 究所ニュース 2010(2)：通巻 No.50
発行２０１０年２月２８日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

ハンザキをめぐる民俗資料②

## ハンザキ張子

大ハンザキに馬乗りになって退治する三井彦四郎の張子の玩具を見つけたのは、ハンザキ調査を始める前にと、近代的研究の発祥の地岡山県湯原を視察した時でした。この話はよく知られており、美作の国川上郷の郷士の倅で元気者の三井彦四郎が旭川の龍頭ケ渕に飛び込んで退治した大ハンザキの物語だ。鯢（ハンザキ）大明神縁起には長さ三丈六尺（10㍍ほど）と記されていると言う。大ハンザキは渕の側を通りかかる人馬を丸呑みにすることがあり、人々の難儀を救うために彦四郎は丸呑みにされて腹を裂いて脱出したと言う話にしては、馬乗りになっているのはおかしい。その後、三井家は大ハンザキの祟りで絶えてしまい、村人が祟りを鎮めるために大明神を建立したと言われている。1921（大正 10）年に、この所有者がハンザキ研究で知られる東京帝国大学の石川千代松博士に変更されている

大ハンザキに馬乗りになっている三井彦四郎張子

石川博士は、明治時代に湯原でハンザキの研究を行い、ハンザキ保護センターに標本が残されている。博士は、鯢大明神が取り壊されると聞いて私財で現在の地に移設したと言われている。湯原町では、毎年８月７・８日にハンザキ祭りが開催されている。FRP で作られた大きなハンザキの山車（オス・メスの２基）が町内を揃いのハンザキ柄のユカタを着込んだ町民によって引き回される。祭りに先立って鯢大明神の祠の前で奇妙な儀式が行われている。それは僧侶と神官が揃ってお払いを行うのである。いかにも宗教的にルーズな日本人の発想かと思われる。

写真 1　僧侶と神官が揃ってお払いする神事・仏事？

写真 2　アカウミガメの甲羅上で移動するカメフジツボ

写真 3　ダム湖の減水で慌てふためくハンザキ

写真 4　助手に調査用具を持たせる所長

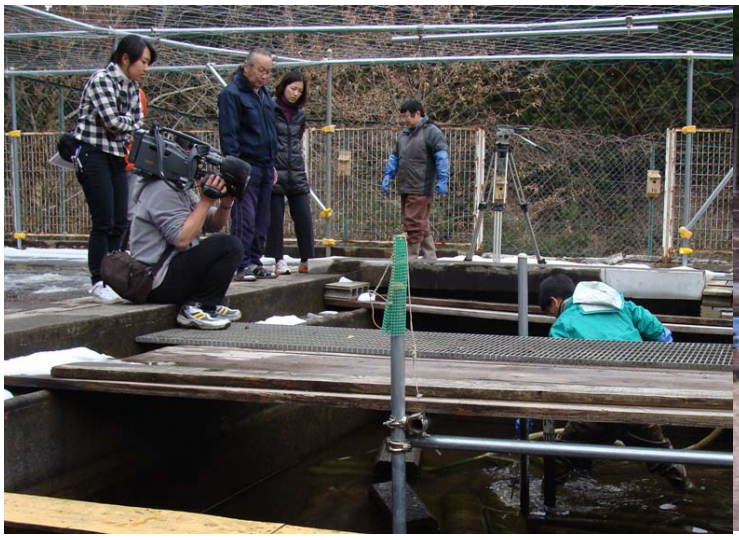

写真 5　兵庫県広報課の取材風景

写真 6　平成 17 年閉校の栃原小学校の解体

## フジツボの話

最近“フジツボ　魅惑の足まねき”倉谷うらら（2009）岩波科学ライブラリーと言う本を一気に読んだ。フジツボ命の著者が正体のあまり知られていない生き物にのめりこんであらゆる方面からフジツボに迫っている。海岸の岩場に付着しているフジツボ類を見て多くの人が“カキが付いている”と言う。カキは二枚貝の仲間で軟体動物であるが、同じような場所に付着しているので誤解されるのかもしれない。水族館の磯の観察会などでフジツボがエビやカニと同じ仲間の節足動物だというと、足が無いし動かないので不審な顔をされることが多かった。付着生活に入るまでにノープリウス幼生・キプリス幼生時代をプランクトンとして過ごすことから、節足動物に分類されている。私も、長い飼育係生活の中で、頭では分かっていても本書の中に「フジツボの脱皮殻」の写真を見つけて驚き、ああそうだったのかと納得させられた。

そして「移動するフジツボ！？」という章のタイトルを見つけて、その昔皆に馬鹿にされたことを思い出した。それはウミガメの甲羅にだけ着生の場を限っているカメフジツボのことだった。1978 年 9 月 18 日に瀬戸内海で保護されたアカウミガメの甲羅に多数のカメフジツボが付着していたので撮影した。いろいろ写真を撮った中に、フジツボの付いている横に白い円の一部が幾つか付いていたのを見つけた。私もその時までは、フジツボが固着生活をすると思い込んではいたが、この写真を見て「移動する」と発言したら、上司・同僚から一斉に「そんな馬鹿なことは無い」と一蹴されたのである。この本を読みながら 2008 年になってやっと私の 30 年前の考えが正解だったことが分かって嬉しかった。さっそく大量のスライドフィルムの山の中から見つけ出したのが写真 2 である。

著者はフジツボで作ったイヤリングを愛用されているそうですが、カメフジツボはペンダントにしても美しいものです。四国の海岸で海亀の調査をやりながら、沢山カメフジツボを付けた個体から幾つかサンプリングさせてもらったことがあったが、硬い象牙質のような表面と付着部の微細な構造の美しさは印象的だ。しかし、イカ物食いの私もフジツボが食えるとは思っていなかった。ただし、近い仲間のカメノテの塩茹では旨かった。柄の部分が短いのが難点なのだが、深い岩の隙間に密生しているのを見つけると中央部のよく成長した個体を間引いて取ると長い柄があって食いでがある。これも海亀調査での挑戦であったが、干潮時に岩の裏側で真っ赤な梅干のようになっているウメボシイソギンチャクは口に含んだだけで吐き出した。渋いと言うか何とも言い様の無い味であった。

切手のコレクションは子供の頃には一度は経験したことがあるのではないだろうか。私もそうだったが、水族館の飼育係になってから再開した。ただし、水生生物のみのコレクションに限定している。この本にもフジツボ類の切手写真が出ていたが、私のコレクションに無いものばかりだった。あまりフジツボに執着していなかった結果だろう。集めた数十枚のウミガメの甲羅にもフジツボが付いた切手は一枚も無かった。わずかに本書にも出ていたザトウクジラの切手にフジツボらしきものが見つかっただけである。

## “ミリオンダイス”「イモトが 24 時間で奇跡の珍獣発見！」

日本テレビの新しい番組の名である。木曜日 19～20 時に放映されている。タレントが東京を出発してから 24 時間以内に目的を達することができれば、ダイスを転がして“日本”が出れば 100 万円ゲット、最低がベトナムのドンで 5,000 円の由である。取材の電話があって「冬の川でオオサンショウウオを発見できますか」ということだった。私は「見ることは可能」と簡単に答えました。実は、姫路の水族館や広島の動物園に問い合わせたら「冬だから難しい」と断りを言われたそうです。その理由はテレビの馬鹿騒ぎ番組を警戒しての断りだったろうと思います。確かに、昨年もどこかのテレビ局でひどい大騒ぎするだけのハンザキ番組があったので、特別天然記念物を軽々しく扱ってほしくないということと片棒を担がせられるのは真っ平御免だと言うことだと思いました。

そういったことを十分に承知の上で私が取材に応じることに、NPO スタッフからも危惧の念があったのも事実ですが、受ける方向で話を進めました。ただし、私もできればやりたくは無かったのですが、断ればまたどこかの誰かに話が回るだけだと考えました。そこで条件を幾つか出して、それに応じてくれれば協力することにしたのです。出した条件は①NPO 法人に寄附金を出す②撮影現場ではまじめに取材する③番組内で NPO の活動状況・河川環境やハンザキの保全などについてのコメントを入れる。

バラエティ番組ですから、これでは断ってくるだろうと考えていたのですが、スタッフから、それでやりたいと、電話があって 10 日ほどでタレントのイモトアヤコさん以下 5 名のスタッフが来所しました。地域の方数名のインタビューや河川の下見をした上で私の夜間調査の助手を“マユさん”が務めるということで、10 ㌔近い調査用具を入れた背負子を背負って同行してもらいました。初めての夜の川で真冬の水温 4 度 C、気温は零下 3 度 C という厳しい気象状況で、重い荷物を背負っての調査同行は大変だったと思いますが、おかげさまで私の方は楽をさせていただきました。おまけにマイクロチップ未挿入個体を計測でき 1,486 個体目の個体登録ができたのです。

翌日は、ハンザキ研内で展示風景や河川の護岸の工夫などを取材して終了しました。さて、1 か月後の放映日が決まってからは、少々心配になりました。それはどんな編集になっているのかということです。編集しだいでは単なる馬鹿騒ぎ番組になってしまいますし、それに付き合った私も非難されることになります。ハンザキ研にはテレビを置いていませんので当日は見ることができませんでした。後日、録画したものを見せてもらいましたが、なかなか良い番組に編集されていましたので、一安心しました。

周辺からの批評も、「お笑い番組でも立派な教育番組になっていた、単なる教育番組よりも啓発効果が大きい」、「見終わった後で、すっきりした素直な楽しさが味わえた」などなど好評でした。おまけに、番組の最後で黒字分の寄附ということで一見の取材陣なのに去った後まで配慮していただきました。当方の活動が十分に理解していただけたものとして、私も感謝していますし、嬉しいことでした。有難う！マユさんとスタッフの皆さん！！！

## ダム湖に閉じ込められたハンザキ

ハンザキ研のある市川水系は、上流を関西電力の黒川ダム、下流は兵庫県の多目的ダムで区切られています。この二つのダムは昭和の 40 年代に完成しています。当時はバブル・高度成長時代真っ盛りと言う状況で、環境に対する配慮や関心はほとんど無かったようです。ダムからの放水は底水を流す古いタイプのもので、当ニュースレター№36 にも書きましたように、夏の冷水、冬の暖水放流は水中生活者たちへ大きな脅威を与えています。夏はダムの底には水温の低い水があり、冬は夏に暖められた温かい水が溜っています。新しく作られたダムではそのときの川の水温に近い層から選んで放水できるようになっているそうです。また、ダム湖に沈む範囲の立ち木は切り倒して搬出してダムの水が富栄養化してプランクトンの大発生による淡水の赤潮発生を防ぐようにしています。しかし、黒川ダムでは水中林が残されたままで減水するとその姿が現れます。

所でこのダム湖にハンザキが見られるのです。生野ダムに流入する幾つかの流れの間で、登録したハンザキが別の支流で発見されたりします。これは大水でダム湖まで流されて反対側の支流を遡っていたものと考えられます。下流に大きな水溜りがあれば海まで流されることは無いでしょう。しかし、上流の黒川ダム湖に取り残されているハンザキは戻る河川がありません。仕方なく湖の岸辺の浅瀬で立ち木の根方に潜んだり転がっている岩の下などに隠れています。この黒川ダムは揚水式発電所の上部ダム湖であり、発電が開始されると急激に水位が低下していきます。浅瀬に休んでいたハンザキたちがあわてて姿を見せます。詳しい調査はしていませんので繁殖しているかどうか分かりませんが、可哀想なことです。日本最大の発電量を誇るダム湖の中で、このような悲劇が繰り返されているのです。

現在であれば、事前調査を実施してダムの工事が終わった後に下流へ放流することになるのでしょう。しかし、昭和の 40 年代ではそんなことはお構いなしで工事が行われたのです。黒川ダム湖には幾つかの沢が流れ込んでいますので、沢ごとにどのくらいの個体が取り残されているのか分かりませんが何とかしてやりたいものです。

発電所の所長さんには、季節の良くなった初夏にでも“ハンザキ救出作戦”を実施しませんかと申し入れをしています。地域の方もそれは良いことだから協力したいと言っているのですが、関西電力の方からはまだ返事が来ません。長生きする生き物ですから閉じ込められてから 40 年、まだ多くの個体が生活しているのではないかと思います。できるだけ早く救出してやりたいと思っています。電力会社側にとっても環境に配慮した活動として企業のイメージアップに繋がるのではないかと思います。きっとこのような事例は各地にあるのだと思うのですが、黒川ダムをきっかけにしてこういった活動が広がれば幸いだと考えています。ハンザキの他にも閉じ込められ見捨てられている生き物がいるだろうと思います。あまり知られていないようで意外だと思われるでしょうが、アメリカの発電所に次いで世界で第二位の関西電力の黒川ダム湖と奥多々良木発電所が名実共に環境にやさしいダム湖になることを願ってやみません。

## ハンザキ研日誌　　　　２０１０年２月

１日　図書室の整理(第五図書室まであるが、分類のタイトルを付ける)
３日　11 ある倉庫などにネームプレートを付ける
４日　円山川水系自然再生推進委員会技術部会へ(円山川防災センターにて)
５日　旧・生野町立栃原小学校(平成 17 年閉校)から備品の搬出
６日　但馬の自然環境保全活動報告会(但馬長寿の郷にて)7 団体の発表あり。
９日　オオサンショウウオの月例健康診断（柿本修一氏他）
兵庫県広報課“生物多様性ひょうご”番組取材（2 月 21 日 22 日サンテレビ放映）
１０日　岡山県真庭市オオサンショウウオ生息地天然記念物指定地にて不法埋め立て事件
１１日　“共生の広場”ポスター発表にて“館長賞”受賞（県立人と自然の博物館にて）
１２日　株式会社ウエスコの吉田環境部長と亀崎直樹氏(4 月からの神戸市立須磨海浜水族園園長)来所
１６日　・兵庫県文化財保護審議会開催(兵庫県公館にて)
・GS－296 終了（1 月 28 日～）
１７日　国交省姫路河川国道事務所にて会議(揖保川の整備計画について)
１８日　GS－297 開始（～2 月 26 日まで）
２０日　・旧・生野町立奥銀谷小学校から 2 度目の備品搬出)
・　NPO 法人の事務局会議 6 名参加
２１日　兵庫県広報番組“生物多様性に取り組む”県立人と自然の博物館などと放映
２２日　久し振り（1 月 25 日以来）にアンコ淵にハンザキ出現（モニターで 2 個体発見するも、1 個体のみの採捕）
２４日　今年のキッズ・ラボ第 1 回会議（生活改善センターにて 11 名参加）
２５日　・京都学園大学・原雄一教授と学生 16 名見学に
・　日本テレビ“ミリオンダイス”放映
２６日　GS－297 終了（2 月 18 日～）
揖保川水系流域委員会出席（宍粟市防災センターにて）
２７日　GS－298 開始（～3 月 14 日）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

## ハンザキ所長のツブヤ記録

今日は 3 月 6 日、ようやくハンザキ研ニュースの発行が追いついてきた。この 1 週間ほどで№48・49・50 を稿了したということになる。どうも滅茶苦茶な所長だとお考えになる方が多いでしょうが、切羽詰ってくるとこんなことになるのでしょう。今月は 27 日間滞在で 169 人が来所である。飛び入りの見学者あり、NPO のスタッフとの打ち合わせあり、この合間に委員会、講演会、発表会、資材や食料の調達とフル回転しています。

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）